

# Peter Mark Rogetの医学/博物学言説の受容

— *Thesaurus*の分類学的思考の起源—

Acceptance of Medical Science and Natural History Discourse by Peter Mark Roget: The Origin of Taxonomic Thought in *Thesaurus*.

加藤 聡\*

Satoru Kato

## 1. はじめに

### 1.1 問題の所在

1852年ロンドンに1つの類義語辞典が登場した。それがピーター・マーク・ロジェ (Peter Mark Roget, 1779-1869) による *Thesaurus of English Words and Phrases Classified and Arranged So As To Facilitate the Expression of Ideas and Assist in Literary Composition*<sup>1</sup> (Roget 1852) (以下、『シソーラス』) である。小島義郎によれば、英語の専門的な類義語辞典は18世紀になってから登場したものであり、2種類に分類することができるという。その1つは類義語間の意味の区別を記述するものであり、もう1つは類義語のリストを列挙するものである (小島 1999: 134)。小島はリスト化された類義語辞典としてロジェの『シソーラス』を挙げている。また、オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー (Oxford English Dictionary、以下OED) から *Thesaurus* の項目を紐解くと、「意味に応じて列挙された概念や言葉のコレクション」と定義付けがされ

ており、この意味を最初に用いたのがロジェの『シソーラス』であることがわかる。それゆえ、『シソーラス』は近代類義語辞典の新たな出発点であり、ジャンルとしての類義語辞典を分析する際に必要不可欠な対象であるといえる。その重要性は他の辞書と比較すると際立つ。

同時代のイギリスではジェームズ・マレー (James Murray, 1837-1915) によってOEDが編纂されている。OEDはアルファベット順に単語を配列し、その言葉の持つ意味を年代順に積み重ねていくという歴史主義の形式を持ち合わせている。それと比較するならば、正統派のOEDとは異なり、ロジェの『シソーラス』は概念別という特異な様相を見せるが、同時代にこの構造を持ち合わせるようになった経緯、またその意味はどこにあるのだろうか。問題となるのは、かつてワイリー・サイファーが『文学とテクノロジー』で論じた点と重なる。つまり、「十九世紀は科学の世界でも、歴史の世界でも、

\* 東京大学大学院学際情報学府博士課程

キーワード：類義語辞典、インテレクチュアル・ヒストリー、分類学、自然科学、博物史

哲学、芸術の世界でも変わりなく方法論の世紀」(サイファー 1972: 12)であったならば、

## 1. 2 先行研究の問題と解決方法

では、これまでロジェの『シソーラス』の分析はいかにして行われてきたか。特筆すべき研究成果がヴェルナー・フルンによって提出されている(Hüllen 2004; 2009)。フルンの研究はロジェの『シソーラス』を辞書史の中に位置づけるという作業を行うために、プラトンに始まる類義語の実践やロンドン王立協会のジョン・ウィルキンズ(John Wilkins, 1614-1672)による普遍言語に言及しつつ、辞書史と言語記号論の間で分析を行っている。しかし、フルンの研究は『シソーラス』という辞書そのものに焦点を当てる分析のため、本稿が明らかにしようとする『シソーラス』以前のロジェに関する記述が十分ではない。

また一方で、ウィルキンズとの関係性や時代背景による『シソーラス』の意義については、

## 2. ロジェの人物交流

### 2. 1 医学/博物学言説の中のロジェ

1700年以降のイギリスでは、都市環境は産業革命を経て劣悪になっていった。紡績機と織布機が発明され、さらにはジェームズ・ワット(James Watt, 1736-1819)の蒸気機関によって生産効率は上昇し、鉱山業などが発達する。その一方で、工場制度によって様々な職業病が生まれ、また労働環境の悪さによって喘息、狭窄症、角膜炎、白内障などが起こり、コレラやチフスといった伝染病で亡くなる人が増加した

ロジェの『シソーラス』が問われるべき点はその方法論とロジェの思想の起源である。

17世紀との連続性を指摘した高山宏の分析が示唆に富むものである(高山 1990)。高山の分析は時代の連続性に焦点を当てたため、言語と概念の関係性が記述の中心となるが、ロジェがどの程度17世紀の思想と方法論を共有していたのかは『シソーラス』単独で分析できるものではなく、ロジェ自身の執筆した論文等を分析して初めてわかるものである。それにも拘らず、ロジェが残した多くの論文についての分析は十分ではない。

それゆえ、本稿はロジェの『シソーラス』における方法論の起源を明らかにするために、上記の先行研究における辞書内部の分析から離れ、ロジェという個人が受容した社会的、学問的背景を分析する必要がある。

(長島 1987: 130)。この都市環境は一刻も早く解決すべき問題であったが、その一方で産業の発展を象徴するものであった。

こうした時代背景の中でロジェは1779年に生まれる。父親のジャンはスイスのジュネーヴ生まれだったが、後にロンドンに移り住んでいる。都市環境の悪いロンドンで生活することで、ジャンは肺結核症に悩まされることになり、治療の甲斐なく1783年に亡くなる。ロジェ

がわずか4歳のときであった。父親の死や都市環境はロジェに少なからず影響を与えた。父の死による精神的抑圧とそれに伴う行動については、ロジェの『シソーラス』と関連付けてすでに指摘がされている<sup>2</sup>。またロジェがロンドンに生まれたにも拘らず、エディンバラ大学へと進学しているのは、都市環境が身体に与える影響をロジェの母親が心配したために、エディンバラへと移住したことに拠る (Kendal 2008: 53-56)。当時のエディンバラ大学はオックスフォード大学やケンブリッジ大学と異なり、英語圏において医学研究の中心地と呼べる場所であった。そこでロジェはラテン語で論文を執筆し、1798年6月25日に学位を修めている。論文のタイトルは“Tentamen physicum inaugurale de chemicæ affinitatis legibus”であり、化学の結合に関するものであった (Roget 1798)。この論文は、アルベルトゥス・マグヌスからアイザック・ニュートンまで多くの化学者、神学者が考察してきた原理の伝統を引き継ぐものであり、ジョセフ・ブラックの教えである「化学は他の多くの知識の枝との関係性で理解しなければならない」という結合術との関係性を示すものであった (Kendal 2008: 78-79)。だが、ロジェはこれ以降化学について論じることはほとんどない。しかし、他との関係性で理解するという思考の方向性は、その後ロジェの学ぶ医学/博物学、そして『シソーラス』へと受け継がれていくのである<sup>3</sup>。

ロジェはロンドンで生活をしながら、1800年に下水道の活用に関する仕事をジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham, 1748-1832) と共同で行っている。ベンサムは都市化の進むロンド

ンの下水活用について取り組んでいたが、そこに伝染病の研究を行っていたロジェが協力した。このベンサムとの出会いは重要である。ロジェが『シソーラス』を出版したとき、ベンサムはウェストミンスター・レビューに「文学者に必要不可欠」と賞賛をし、さらに「ロジェは最高級の読み書きに関する道具の作成者としてサミュエル・ジョンソンと同列に並ぶだろう」とまで評価している (Bentham 1853: 311-312)。ベンサムは『シソーラス』の持ち合わせていた構造に意義を見出していた。そしてロジェもベンサムの仕事に意味を見出していたであろう。というのも、ベンサムの活動は都市環境の改善というロジェ自身の活動と重なりあう。また1790年にはベンサム考案のパノプティコン監獄を建設する計画がアイルランドで持ち上がっており (土屋 2012: 44-45)、そこにみられるベンサムの功利主義的な側面に対してロジェが理解を示していたとしても不思議ではない。

こうした都市環境の整備における活動とは別に、ロジェによるアカデミーの活動を考慮しなければならない。ロジェの活動の中心はアカデミーでの一連の講義であり、その講義のなかで分類学という新たな思考の基準を獲得することになるからである。その分類学はロジェの『シソーラス』にみられる特徴の1つである。

ロジェが1804年以降、活動の場を様々な医学機関やアカデミーに移していることは注目に値する。マンチェスター・ライブラリーとフィロソフィカル・ソサエティの援助のもと公衆衛生についての研究を深めており、さらにグレート・ウィンドミル・ストリート・スクールでは

ジョルジュ・キュヴィエ (Baron Georges Léopold Chrétien Frédéric Dagobert Cuvier, 1769-1832) の分類学にもとづく動物生理学の講義を行っていた。これはロジェの思考の枠組みを規定する重要な事実である。なぜなら、医学言説内のロジェの論文については次章で論じるが、キュヴィエによってもたらされた比較解剖学の視点はロジェの研究の中心に置かれることになるからである<sup>4</sup>。

また多くのアカデミーの中で、ロジェに大き

## 2. 2 アカデミーの中のロジェ

ロジェは学問機関の設立にも尽力する。1837年からロンドン大学の設立のために運営委員会や理事を担当していたが、そこで問題となったのは宗教的な対立であり、大学の制度であった。例えば、オックスフォード大学とケンブリッジ大学は国教会聖職者によって成立する教育機関であり、上流階級の教育は両大学における古典が中心であった (長島 1987: 150-151)。入学者は国教徒に限るという規則のため、非国教徒は大学とは距離をとったアカデミーを設立していった。非国教徒のアカデミーでは外国語や数学、歴史、地理、法学といった人文科学に関する科目以外にも、科学実験といった技術実習が行われていた。アカデミーの中ではとりわけ、1757年のウォリント・アカデミーと1786年のマンチェスター・アカデミーが有名である。特に前者は、J・プリーストリが関わっていた有名なアカデミーとして挙げられる。長島伸一はこの2校が「産業革命期の発明史に光彩を放っているM・ボルトンやJ・ワットらの知識人グループが創った『ルナー協会』や、『マ

な影響を与えることになったロンドン王立協会との直接的な関わりは1827年の王立協会書記を務めたことに始まるが、実際にはロイヤル・インスティテュートに参加していた1821年頃から接触があったとされている。王立協会との関わりについてはすでに先行研究が多数存在し、また1つのアカデミーについて詳述することは本稿とは別の論点になるため、ここでは指摘に留める<sup>5</sup>。

ンチェスター文学哲学協会』の会員らの、熱い支持と必要から生み出されたものであった」と指摘している (長島 1987: 151)。アカデミーとは学問交流を促進するものであり、ロジェにとってあるべき知の交流は宗教対立に左右されることのない、純粹に知識の追求がされるものでなければならなかった。

牛山輝代はロジェによる学問機関の設立運動を、「非国教徒としての自覚」と「オックスフォードおよびケンブリッジ両大学の相変わらずの独占的地位に対する、抗議のあらわれであった」と分析している (牛山 2001: 15)。牛山が指摘しているように、ロジェにとって「非国教徒」という立場は当時の大学入学制度に対する1つの大きなウェイトを占めている一方で、ロジェの活動の中心には下水道の処理やフリゲダリウムの作成、保健所での無償の働きといった社会環境の向上があり、それゆえロジェの目指したものは市民の生活水準、学問水準の向上であったといえる。その活動の一つに『シソーラス』の作成も挙げられる。

1852年に出版される『シソーラス』へ向けた具体的な準備は、王立協会書記を退任した後の1848年からわずか4年間であった。だが『シソーラス』へと引き継がれる言語の蒐集は、何年にもわたって行われてきた。『シソーラス』の「序文」の中で、ロジェはすでに1805年から言葉の「蒐集/編纂」を始めていたと告白している (Roget 2002: xviii)。その時から1852年までの約50年間、ロジェは様々な分野で活躍した経験から『シソーラス』のために言葉を蒐集していたことになる。だが、ロジェが『シソーラス』作成時に交わした書簡については、先の大戦によって焼却してしまい現在確認することができない。フルンが主張するように、「序文」以外に私たちはこの辞書におけるロジェの思想や編纂方法について情報を提供してくれるソースを得ることはできないのである (Hüllen 2004: xviii)。それゆえロジェの著した書物や論文を闊歩し、ロジェが辿ってきた思考方法の断片を再構成することが必要となる。

以上、ロジェの活動に焦点を当て、いかにして医学/博物学の言説と関わりを持ってきたのかを明らかにした。ロジェの人生をフルンは矛盾のあるものと評価したが (Hüllen 2004: 16)、その判断はロジェの付き合っていた人脈の脈絡の無さに起因している。ロジェが交流を持っていた人物について、フルンは法学者ベンサム、鉱物者ウィリアム・ヒューエル (William Whewell, 1794-1866)、科学者ハンフリー・デーヴィー (Humphry Davy, 1778-1829) やジェームズ・ワット、またロマン派詩人コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の名前を挙げている (Hüllen 2004: 16)。これらの人物の間に研究の一貫性を認めるのは難しく、それゆえフルンの判断は妥当なものであるが、その一方でロジェがロンドン王立協会書記として、また多くの科学アカデミーの設立に尽力したことを考慮すれば、こうした人物交流の多様さは必然的なものといえる。

### 3. 医学/博物学言説におけるロジェの分類学的思考

#### 3.1 分類学の受容

このような活動を通して、ロジェは一体何を書き残してきたのだろうか。これまでの議論から、1852年に『シソーラス』を作成する以前のロジェを医学/博物学言説の研究者とみなすことができる。本章では、医学/博物学の言説の中で分類学的な思考がロジェの中で確立していく過程を考察する。

まずロジェの論文について整理する。以下に列挙するのは、ロジェが著した医学や博物学に

関する論文である<sup>6</sup>。年代を『シソーラス』以前に当てることで、多様なコンテキストが『シソーラス』へ流れ込んでいることがみてとれる。

1805. *Syllabus of a Course of Lectures on Anatomy and Physiology.*

1811. "A Case of Recovery from the Effects of Arsenic, with Remarks

- on a New Mode of Detecting the Presence of This Metal.”
1812. “Recherches sur les Moeurs des Fourmis Indigènes.”
1815. “Nouvelles Observations sur les Abeilles.”
1820. “On a Voluntary Action of the Iris.”
1822. “On the Functions of Progressive Motion in Vertebrated Animals.”  
 “Progressive Motion in Vertebrates.”  
 “Chemical Function.”  
 “Respiration.”  
 “Vision.”
1826. *An Introductory Lecture on Human and Comparative Physiology, Delivered at the New Medical School in Aldersgate Street.*
1827. *Electricity.*
1829. *Galvanism.*
1831. *Magnetism and Electro-Magnetism.*
1834. *Animal and Vegetable Physiology, Considered with Reference to Natural Theology.*

ロジェは熱心に論文や書物を執筆していたことがわかる。彼の関心が医学、博物学、科学といった自然科学のあらゆる領域に向かっているのは明らかである。興味深いのは、ロジェの研究は生理学が中心に構成されている点である。

ここでは1826年の『アルダースゲート・ストリートのニュー・メディカル・スクールで開催される人間と比較生理学についての入門講義』

(以下、『入門講義』)を例にとり、ロジェが受容した知のあり方を確認する。この書物はロジェがメディカル・スクールで行った一連の講義に関するもので、主著『自然神学を参照した動植物の生理学』より8年前に書かれたものである。

ロジェが初めて生理学について論じたものは、1805年にマンチェスター・ライブラリーやフィロソフィカル・ソサエティで講義を行った時に執筆した『解剖学と生理学についての講義科目シラバス』であることに注意したい。そのときからロジェの研究は生理学が中心となっていた。それゆえ、この『入門講義』はロジェの中期の作品にあたる。

ロジェは『入門講義』の謝辞のなかで、生理学の研究はキュヴィエの仕事を引き継いだものであることを告白している。

講義で伝えられることには限界があったため、その時間内で伝えられたであろうこと以上の幅広い説明をいくつかの話題について与えている。また私は生理学上の差異、つまりキュヴィエが『動物王国』でそれぞれの区分に属する動物を例に示した差異に基づく分類学の一覧表 (a tabular view) に書き足しを行った (Roget 1826: iv)。

すでにリンネによる動植物の分類体系が確立されていたにも関わらず、ロジェにとっての分類学はキュヴィエをモデルとしたものであった。ロジェはこの著作の最終ページに「キュヴィエによる動物分類の概略」と題した一覧表を添付している。そこにはキュヴィエが行った

以上の動物分類は記述されていないが、知識を一覧表で提示をするという方法論が既にロジェの中に芽生えており、世界を一望するための方法として用いられている。

ロジェの著作の特徴は、事象をいかに詳細に記述するかという点に重きがある。そして記述における中心は「特徴/性格」や「構造」にある。なぜなら器官の特徴を構造による視点から分析するという手法は、キュヴィエによって実践された比較解剖学の方法であったからである。リンネが動植物分類に用いた特徴とは異なり、分析対象の器官の関係性に注目が集められていた。

さらにロジェは人間の身体をその他の事物と比較することにより、その人間固有の「特徴/性格」を明らかにしようとした。ロジェが生物に対して持ち合わせていた概念は、個別の特性/性格の集まりによる集合体というものであった。一つの生物が複数の器官からなる統一体であるということを次のように主張する。

異なった流動体によって占められ、介在された腔を持ち、規則正しい配列を持った繊維や薄膜を含んでいるある機械的な形状や組織、そしてあるシンメトリカルな配置、つまりすべての生体のうちに観察できる配置は、私たちに個別のシステムの概念をもたらす。それは多かれ少なかれ複雑なものであるが、例外なく明らかに特定の目的のために適応したものである。そして、そのような性質を私たちは「組織された構造 Organized Structure」と命名した (Roget 1826: 2)。

「すべての生体において in all living bodies」という表現は示唆的である。ロジェは「人間」を主題としているが、その視線の先には人そのものだけでなく、広く自然界における生物まで見据えていることがわかる。

ロジェが使用している用語にも注意を向けよう。ロジェが自然界について言及するとき、例えば「ミネラル・キングダム the mineral kingdom」という表現を使っている (Roget 1826: 2)。「キングダム」という言葉は帝国そのものを指し示し、さらにはそこに1つの世界があることを意味している。また同時に分類学において「界」を表す言葉として用いられる。それはキュヴィエの *Le Règne Animal Distribute* (Cuvier 1817) における *règne* であり、英語版が *The Animal Kingdom* (Cuvier 1834) であったことを確認すれば、ロジェがそのようなメタファーを比較解剖学の研究を通して身につけたといえる。この用語は、荒俣宏が指摘するように、キリスト教世界と王国の秩序の関係性を暗示しており、ノアの方舟以来の伝統的なメタファーと重なる (荒俣 1984: 78)。それゆえロジェも自然界が世界の表象物であるという認識を意識していただろう。その精神はブリッジウォーター論文に引き継がれる。

ロジェは比較解剖学の知識に依拠することで対象物の類似性を否定する。それはリンネの動植物分類と距離を取ることを宣言することと同義である。ロジェはリンネの方法論によって生まれた解釈を次のように批判する。

動物と植物の増加は、真の類似を生じるも

のではない。実際にそれは異なる物質の添加によって影響を受けるからである。私は全くもってこれら[引用者：動植物の性質を修正するプロセス、変質と化合という変遷を操作する構成されたシステムの特性に同化すること、その構造によって動植物を同一視すること]の違いを訴えたいのである。なぜなら、それらはリンネによって規定された名高い三つの自然世界の定義によって見失われたからである。つまり鉱物の育ち、植物の育ちと生、動物の育ちと生と感覚である。(中略) これらの間には真の類似はないのである (Roget 1826: 5-6)。

上記でロジェが引用した「自然世界の定義」は、リンネが『自然の体系』の中で記述した「自然の3界についての所見」の第14項にある (Engel-Ledeboer 1964)。ロジェはリンネの表現の仕方によって、「類似analogy」が存在するという誤解を招いたと指摘する。博物学に関わるロジェにとって、分類学の祖と言われるリンネの存在を無視することはできなかつたといえる。しかし、ロジェはこれまでの自然科学の研究を真っ向から否定しているわけではなく、むしろそうした研究によって新たな思考が可能になったことを次のように主張する。

比較生理学は動物の博物学 (the natural history of animals) の先行研究によって

確立されたものであるが、とても重要な光を動物学の知 (the science of Zoology) に与える。そしてより顕著なのは、動物の分類学と呼ばれる科学の根底を構築するのである (Roget 1826: 86-87)。

それゆえ1834年にブリッジウォーター論文の1巻として書かれた『動植物の生理学』はロジェ流の「動物学の知」、そして「動物の分類学」を示すものであった。『動植物の生理学』は専門領域として大きな成功を収めた論文であり、同時にロジェの名前を広めるには十分すぎるものであった。しかし、この論文は必ずしも良い評価だけをもたらすものではなかつた。生理学についての基本的な知識を与えるには十分であったが、ロンドン大学の比較解剖学と動物学の教授であったロバート・エドムント・グラント (Robert Edmond Grant, 1793-1874) の考察に近いものであったため、ロジェは剽窃だと責められることも少なくなかつた (Emblen 1970: 241-245) <sup>7</sup>。

この論文では動植物という自然界にある身近な対象を論じてはいるものの、その射程の先には神が描き出した宇宙の秩序の理解という意図がある。ロジェは宗教的世界観によって導き出された自然の秩序を分類することに関心があったのである。それはブリッジウォーター論文の性格から導き出せる。



### 3. 2 ブリッジウォーター論文

ブリッジウォーター論文 (*The Bridgewater Treatises on the Power, Wisdom, and Godness of God, as Manifested in the Creation.*) は、当時のロンドン王立協会に関わっている人物を中心にさまざまなテーマに関する論文を執筆させ、まとめたものを総称する言葉である。副題は「創造主において表明された力の知と神の恩恵」と付けられている。では、この論文集が出版された背景はどのようなものであったのか<sup>8</sup>。

1825年2月25日にブリッジウォーター伯爵によって公的資金として評議会に出資された8000ポンドが、ロンドン王立協会の会長によって選出された論文執筆者に報酬として配当されることになった。このときの王立協会会長はデイヴィス・ギルバート (Davies Gilbert, 1767-1839) であった。彼はカンターベリー大僧正とロンドン主教との話し合いのもと、論文執筆者の選定を行った。論文の執筆者は、政治経済学者トマス・チャーマーズ (Thomas Chalmers, 1780-1847)、科学史家ウィリアム・ヒューウェル (William Whewell, 1794-1866)、地質学者ジョン・キッド (John Kidd, 1775-1851)、外科医チャールズ・ベル (Charles Bell, 1774-1842)、地質学者ウィリアム・バックランド (William Buckland, 1784-1856)、昆虫学者ウィリアム・カービー (William Kirby, 1759-1850)、化学者ウィリアム・プラウト (William Prout, 1785-1850)、そしてロジェである。それぞれが論文を執筆する形で、ブリッジウォーター論文が構成されている。全体像は以下のようになる (Roget 1834: xvi-xvii)。

Thomas Chalmers. *On the Power, Wisdom, and Goodness of God as Manifested in the Adaptation of External Nature to the Moral and Intellectual Constitution of Man.*

John Kidd. *On the Adaptation of External Nature to the Physical Condition of Man, principally with Reference to the Supply of his Wants, and the Exercise of his Intellectual Faculties.*

William Whewell. *Astronomy and General Physics Considered with Reference to Natural Theology.*

Charles Bell. *The Hand: Its Mechanism and Vital Endowments as Evincing Design.*

Peter Mark Roget. *Animal and Vegetable Physiology, Considered with Reference to Natural Theology.*

William Buckland. *Geology and Mineralogy, Considered with Reference to Natural Theology.*

William Kirby. *On the Power, Wisdom, and Goodness of God as Manifested in the Creation of Animals and in Their History Habits and Instincts.*

William Prout. *Chemistry, Meteorology, and the Function of Digestion, Considered with Reference to Natural Theology.*

上記に加え、のちに数学者で計算機器を発明

したチャールズ・バベッジ (Charles Babbage, 1791-1871) によって、9巻目の論文*The Ninth Bridgewater Treatise: a Fragment*が加えられる。このブリッジウォーター論文にまとめられた知識は、当時のロンドン王立協会がいかなる研究をしていたのかという方向性を示す点で重要な論集といえる。いずれの論文も自然神学に関する論文であることは、王立協会の宗教的性格を示している。

牛山輝代は、ロジェが選ばれた理由を次のように記している。

生理学者としての当代の博識高い名声だけが理由であったはずがない。父はカルヴァン派の牧師であり、ユグノー派の母を持つロジェには、生命、宇宙、万物が神の計画にしたがって展開していることを証明すること、自然が神の意図を顕微しているのを示すことは、究極の大望であったと言えるのかも知れない (牛山 2003: 43)。

牛山の指摘はロジェの家庭環境から導き出されるものであるが、ここではむしろ第1章から論じてきたように、学問の言説の中での受容から判断してみたい。

19世紀前半における博物学の領域では、分類学が一つの論点であった。それゆえ「分類」という思考については、ロジェの生涯にわたって貫かれている問題の一つであり、『入門講義』でも議論されていた重要な論点である。ロジェは解剖学の所見を当時の学術雑誌から学んでいたことを明らかにしている (Roget 1834: vii-xiv)。また『動植物の生理学』の序文でこれま

でとは異なり、新たに同時代の博物学者らの研究から影響を受けていたことを次のように告白する。

私は比較解剖学と生理学についての十二分な材料が役に立った。そこには、キュヴィエ、ブルーメンバッハ、カールス、ホーム、ド・ブランビル、ラトレイユ、そしてイレルといった人物の著作、『哲学紀要』、『記憶』、そして『ミュージアム年報』や『自然科学年報』といった雑誌が含まれている (Roget 1834: xi-xii)。

先の著作では理想モデルとしてのキュヴィエと批判対象としてのリンネに力点が置かれていたが、ここではより幅広い学問の影響を告白している。ロジェが言及したのは、ドイツの医者で比較解剖学に精通していたヨハン・フリードリッヒ・ブルーメンバッハ (Johann Friedrich Blumenbach, 1752-1840) やドイツの生理学者であり画家でもあるカール・グスタフ・カールス (Carl Gustav Carus, 1789-1869)、フランスの昆虫学者ピエール・アンドレ・ラトレイユ (Pierre André Latreille, 1762-1833) といった人物であるが、彼らはロジェと同時代人であり、動物学や植物学にかぎらず人類学や内科医といった学問領域で活躍した人物である。キュヴィエがノアの方舟から天変地異説を唱えたように、ブルーメンバッハもキリスト教的世界観を前提とした研究を行っていた。この時代の学問は個別の研究を行いつつも、その背景には宗教による思考の限定を受けていたのである。

またロジェが言及している雑誌に注目してみ

ると、博物学に限定されることのない様々な領域からの影響が読み取れる。『哲学紀要 *Philosophical Transaction*』は、ロンドン王立協会によって出版されている研究誌であり<sup>9</sup>、『ミュージアム年報 *Annales du Muséum*』は、キュヴィエやラマルクが論文を投稿していたことで有名である。ロジェは分類学を起点として哲学的観念に至るまで思想を巡らせていた。先に述べたように、哲学からミュージアムの自然まで視野にいれるのは、神によって創造された世界というキリスト教の世界観をロジェが受容

#### 4. おわりに

本稿はロジェ『シソーラス』の方法論を明らかにするために、ロジェの思想的な起源を探ろうとした。それは、いかにしてロジェが医学/博物学言説を受容し、分類学という方法を捉えていたのか、ということの意味した。言説の受容過程については、アカデミーの中での研究を通して比較解剖学という手法を身につけていったことが明らかになった。その研究手法は構造を意識するものであり、器官の特徴/性格は他の器官との関係性によって定義づけられるものであった。

最終章で論じたように、ロジェにとって分類学による対象の構造化は世界の構造を明らかにすることと同義であった。それゆえ、『シソーラス』とはロジェによって生み出された1つの世界なのである。だからこそロジェの『シソーラス』を分析する際に、彼の医学/博物学言説が重要な位置を占めるのである。

しかし、本稿で論じた医学/博物学の言説の

していたからに他ならない。

以上、ロジェによる分類学の思考について論じてきた。ロジェにとって、分類学は類似ではなく各器官による構造を解明するものであり、さらに宗教的思想を受容していく過程で個別の対象を離れ、世界の秩序を明らかにする方法へと昇華されるのであった。つまり、世界を解読するための方法論としてロジェは分類学を選択したのである。その方法論を自家薬籠中の物とした後、ロジェは『シソーラス』において概念と言葉の分類体系を築き上げる<sup>10</sup>。

みに焦点を当てて、ロジェの『シソーラス』を分析するのは十分ではない。例えばフルンが示したように、ロジェのような項目別の辞典 (Topical Dictionary) は古くより数多く存在していた (Hüllen 1999)。ゆえに、そうした辞典とロジェの『シソーラス』の潜在的な差異を分析する作業が必要となってくる。これまでアリストテレス的分类、スコラ哲学的分類、フランシス・ベーコンの分類などあらゆる分類学的思考にもとづいて辞典が作成されたが、その中でロジェの『シソーラス』は医学/博物学に依拠する新たな分類を提示した。ロジェの『シソーラス』の大きな特徴は分類学的な思考が言語学と結びついていくことにある。そうした多様性から『シソーラス』を新たに解釈する必要性があるだろう。

以上、本稿は『シソーラス』の根底にあるロジェの医学/博物学の言説を明らかにし、『シソーラス』分析を行うための一つの場を提示した。

## 註

- <sup>1</sup> ロジェの『シソーラス』の初版は1852年であるが、その後もロジェは改訂を続けており、ロジェの没年である1869年には第28版が出版されている。その後、数多の編集者を迎えて出版が続いており、2002年にはペンギンブックスから150周年記念版が出版されている。裏表紙には、今日までに3200万部以上の売上があることが記されている。初版は1000部しか印刷されておらず、現物を手にする機会は困難であるが、2014年にケンブリッジ・ライブラリ・コレクションから再版された。
- <sup>2</sup> ケンダルはフロイトの理論について言及し、幼少期のロジェの振る舞いについて父親の死の影響を論じている (Kendal 2008: 45-46)。また、同様にケンダルが指摘するパラコスムと呼ばれる精神状態については、ダヴィッド・コーエンらによる研究を参照すべき (Cohen 1992)。
- <sup>3</sup> ロジェの『シソーラス』の内部に関する論述は別稿を要する。以下、指摘のみ。『シソーラス』における概念の分類は、本稿で明らかにされるように医学/博物学の言説が土台になって形成されるものである。ロジェにとって言語学的な分類と医学/博物学的な分類は『シソーラス』の紙面上で結合するのである。また同時代のOEDやナチュラール・ヒストリーと言語学との関係性についても論じる必要が出てくる。
- <sup>4</sup> キュヴィエの方法論とその思考については、ウィリアム・コールマン (Coleman 1964) が詳しい。
- <sup>5</sup> 多くの論者がロンドン王立協会書記という職業から、同じく書記を務めていたジョン・ウィルキンズとの関係性を指摘するが (Hüllen 2004; 牛山 2001; 高山 1990)、ロジェとウィルキンズの時代を隔てた交流については詳細な分析が求められる。
- <sup>6</sup> エンブレムの著作にあるAppendix IIより作成 (Emblen 1970)。ここでは一部のみ引用したため、完全なリストは上記を参照。
- <sup>7</sup> グラントはロンドン大学教授であり、チャールズ・ダーウィンに影響を与えた人物として知られている。またダーウィンはロンドン王立協会のフェローでもあった。
- <sup>8</sup> プリッジウォーター論文についての情報はロジェ (Roget 1834) を参照。
- <sup>9</sup> ロンドン王立協会の初代書記ヘンリー・オルデンブルク (Henry Oldenburg, 1618/9-1677) によって発刊されている。そのタイトルは *Philosophical Transactions: Giving Some Account of the Present Undertakings, Studies, and Labours of the Ingenious in Many Considerable Parts of the World*。(『哲学紀要—世界の多くの主要地区における創造者たちの現在の企画、研究、努力について若干の説明を与える』) である。
- <sup>10</sup> 分類学的思考が『シソーラス』に流れ込んでいたという点については、詳細な分析が求められる。特に註3との兼ね合いで論じる必要がある。

## 参考文献

- [Bentham, Jeremy]. "Miscellaneous." *Westminster Review*. 59[1853]: 311-312.
- Cohen, David, and Stephen A. MacKeith. *The Development of Imagination: The Private Worlds of Childhood*. London: New York: Routledge, 1992.
- Coleman, William. *Georges Cuvier Zoologist: A Study in the History of Evolution Theory*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1964.
- Cuvier, Baron Georges. *Le Règne Animal Distribue d'après Son Organization, pour Server de Base à l'Histoire Naturelle des Animaux et d'Introduction à Anatomie Comparée*. 4 vols. 1817.
- . *The Animal Kingdom, Arranged According to Its Organization, Serving as a Foundation For the Natural History of Animals, and as Introduction to Comparative Anatomy, by Baron Cuvier, with Figures Designed After Nature: the Crustacea, Arachnides, and Insecta, by M. Latreille*. 4 vols. London: G. Henderson, 1834.
- Emblen, D. L. *Peter Mark Roget: The Word and the Man*. New York: Thomas Y. Crowell Company, 1970.
- Engel-Ledeboer, M. S. J. and H. Engel. *Carolus Linnaeus Systema Naturae, 1735: Facsimile of the First Edition With an Introduction and a first English Translation of the "Observationes"*. Nieuwkoop: B. De Graaf, 1964.
- Hüllen, Werner. *English Dictionaries. 800-1700: The Topical Tradition*. New York: Oxford University Press, 1999.
- . *A History of Roget's Thesaurus: Origins, Development, and Design*. New York: Oxford University Press, 2004.
- . *Networks and Knowledge in Roget's Thesaurus: from Ancient to Medieval*. New York: Oxford University Press, 2009.

- Kendal, Joshua. *The Man Who Made Lists: Love, Death, Madness, and the Creation of Roget's Thesaurus*. New York: G. P. Putnam's Sons, 2008.
- Oxford English Dictionary*. Ed. John Simpson and Edmund Weiner. 20 vols. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, 1989.
- Roget, Peter Mark. "Tentamen Physicum Inaugurale De Chemicæ Affinitatis Legibus". University of Edinburgh, 1798.
- . *An Introductory Lecture on Human and Comparative Physiology, Delivered at the New Medical School in Aldersgate Street*. London: Richard Taylor, Shoe-Lane, 1826.
- . *Animal and Vegetable Physiology, Considered with Reference to Natural Theology*. 2 vols. London: Pickering, 1834.
- . *Thesaurus of English Words and Phrases Classified and Arranged So As To Facilitate the Expression of Ideas and Assist in Literary Composition*. London: Longman, Brown, Green, and Longmans, 1852. Cambridge Library Collection. Cambridge: Cambridge University Press, 2014.
- . *Roget's Thesaurus of English Words and Phrases*. 150th Anniversary Edition. Ed. George Davidson. London: Penguin Books, 2002.
- 荒俣宏『図鑑の博物誌』リポート、1984年。
- 牛山輝代「ロジェの『シソーラス』」『国立音楽大研究紀要』35 [2001]: 13-19頁。
- .「ロジェの類義語辞典『シソーラス』編纂法」『国立音楽大研究紀要』37 [2003]: 39-45頁。
- 小島義郎『英語辞書の変遷—英・米・日本を併せて』、研究社、1999年。
- 高山宏『世紀末異貌』、三省堂、1990年。
- 土屋恵一郎『怪物ベンサム—快樂主義者の予言した社会』、講談社学術文庫、2012年。
- 長島伸一『世紀末までの大英帝国—近代イギリス社会生活史素描』、法政大学出版局、1987年。
- ワイリー・サイファー『文学とテクノロジー』野島秀勝訳、研究者叢書、1972年。



加藤 聡 (かとう・さとる)

[生年月] 1988年10月17日

[出身大学または最終学歴] 東京大学大学院学際情報学府博士課程在籍

[専攻領域] インтеллекチュアル・ヒストリー、知識形成史

[主たる著書・論文] (3本まで、タイトル・発行誌名あるいは発行機関名)

修士学位論文「概念と言葉を構造化する—ロジェ『シソーラス』と17-19世紀西欧の分類学的思考—」

[所属] 東京大学大学院学際情報学府

# Acceptance of Medical Science and Natural History discourse by Peter Mark Roget: The Origin of Taxonomic Thought in Thesaurus.

Satoru Kato\*

What is the starting point of modern Thesaurus? It may be *Thesaurus of English Words and Phrases Classified and Arranged So As To Facilitate the Expression of Ideas and Assist in Literary Composition* by Peter Mark Roget in 1852. This dictionary defined as 'A collection of concepts or words arranged according to sense; also (U. S.) a dictionary of synonyms and antonyms' not only is necessary for the positioning in the history of dictionaries, but also has a relationship with a series of the natural language processing. Therefore, it is said the thesaurus has a wide theme.

However, researches on Roget's *Thesaurus* have not been done sufficiently. Some previous works are discussed from the point of its format. The format of Roget's *Thesaurus* is that words and phrases are arranged according to a system for classifying ideas. Some researchers tried to reveal relationships between the internal structure in the Thesaurus and Plato's practice, John Wilkins's universal language, and other synonym dictionaries. However it's not enough for the *Thesaurus* to analyze them because these researches overlooked ideas or discourse that Roget had before editing it.

Therefore, this paper tries to clarify an origin of the classification system that was handed over to *Thesaurus* by analyzing his acceptance of medical science / natural history discourse and social environments.

Roget was not a language professional. He was a doctor, a scientist, and natural historian. This paper will reveal that the discourse which he accepted was brought from George Cuvier's comparative anatomy and some activities with some Academies. Through the experience, he was well acquainted with the perception of the power of taxonomy. By acceptance of the taxonomic method, the *Thesaurus* has also the same way of classifying words and ideas.

Roget's *Thesaurus* is standing at which scientific classification and linguistic practice come across. It will reveal how Roget got the taxonomic method and what he expected in the method.

---

Doctoral student, the Graduate School of Interdisciplinary Information Studies The University of Tokyo

**Key Words** : Thesaurus, Intellectual history, Taxonomy, Natural Science, Natural History

Therefore, this paper will attempt to clarify that aspect, the Roget's scientific situation.